

平成22年3月14日

京都文化芸術都市創生計画／文化ボランティア／第26回国民文化祭・京都2011推進フォーラム

「まつりをつくる」

2 パネルディスカッション「市民がつくるまつり」

パネリスト:中井敬二氏(京都・祇園祭ボランティア21副会長)

平戸誠一郎氏(横浜トリエンナーレ2008サポーター統括代表)

阿井茂氏(静岡県県民部理事(国民文化祭担当),

第24回国民文化祭静岡県実行委員会事務局長)

コメンテーター:平田オリザ氏(劇作家,大阪大学教授,内閣官房参与)

コーディネーター:平竹耕三(京都市文化市民局文化芸術都市推進室長)

「まつり」についての概要

【平竹】

まず出演者の皆様から御自身がかかわっておられるまつりについて御紹介いただきたいと思います。本来でしたら遠来の方からということなのかもしれませんが、やはり今日は時代の古い順にということで、京都の方はよく御存じのように、祇園祭は貞観11年、869年から始まっておりますので、最初に中井様から祇園祭ボランティア21についてお話いただきたいと思います。

【中井氏】

私、中井敬二といいます。京都・祇園祭ボランティア21という団体の副会長でございます。仕事は「風間薫芳堂」というお店で、線香、御香、それから蠟燭等の商売をしております。

この京都・祇園祭ボランティア21という団体は、今から28年前に日本青年会議所京都大会が開催されることになり、行政や各種青少年団体が集まって、実行委員会が設立され、大会終了後、実行委員会に参加された一部の青年団体や新たに加わった団体が京都青少年活動推進会議という団体を作ったのが始まりです。この団体は、次代を担う青少年の健全育成と、団体の親睦を通じて豊かな福祉ある社会を作っていくことを目的としておりました。私自身も、車イスの使用者等、身体の不自由な人たちの自立生活支援活動を行う団体の一員として、この会に参加させていただきました。

そして、青少年活動推進会議の具体的な活動として、世界的なまつりの祇園祭に何らかの形で参加できないかと考え、無理を承知で山鉾連合会の当時の会長だった田中常雄様をはじ

め、各山鉾町にお願いして、今から25年前に山鉾の曳き手舁き手として参加させていただくことになりました。そのときは、各山鉾とも、それぞれで曳き手舁き手を募集されておりました。各町内から集まられた方もおりますし、大学のサークルから曳き手舁き手として参加された方も多かったようです。

青少年活動推進会議は、祇園祭だけではなく、成人式や車イス駅伝でも活動しておりましたが、祇園祭という大きな行事にかかわらせていただくにあたり、それぞれの活動ごとに団体を分け、「京都・祇園祭ボランティア21」が設立されました。

祇園祭の巡行にかかわって25年、最初は200人くらいの曳き手舁き手ボランティアでやっておりましたけれども、今は全山鉾32基のうち、21基に曳き手舁き手として500人から600人という人数を集めております。

山鉾の曳き手舁き手として参加することに加えて、巡行を円滑に進めるために各山鉾の理事に付く方や沿道整備、祇園祭は基本的に男性だけが巡行に参加しますので、女性の方は参加できませんけれども、巡行の進行具合を把握するための無線連絡や湯茶接待には、女性の方も参加していただいて、多くの方たちに協力いただいております。また、身体の不自由な方たちも、なかなか直接的には参加できませんけれども、パンフレット等の印刷物にかかわっていただいております。

祇園祭の曳き手舁き手は、昔は色々な人が参加されていたそうです。版画なんかでみると、武士の方が曳いておられたり。町衆の中で曳き手舁き手が集まらなくなると、近郊の村や町に曳き手舁き手を請け負っていただいたということもあるそうです。近年は大学生の参加もありましたけれども、大学の前期試験が9月から7月になってしまって、祇園祭そのものに学生が参加しにくくなったんです。そういうときに私たちの団体がかかわらせていただいたという経過があります。

祇園祭ボランティア21には、私の団体のように福祉団体の参加もありますし、ボーイスカウトや青年会議所、裏千家淡交会の青年部や立正佼成会等、色々な団体が集まっております。南禅寺のお坊さんなんかも曳き手舁き手として参加していただいておりますし、国際交流機構という団体からは、留学生の方が毎年30人から40人参加されています。

祇園祭ボランティア21の活動に参加するうえでの重要な点は、自らの意思で参加し、責任が伴っていることを自覚するという点です。「祇園祭に参加する」と言っておいて、途中で都合が悪くなったから参加するのをやめたいというのは許されません。事前のオリエンテーションにも参加を義務付けていますし、八坂神社にお参りすることにより氏子の一員としての自覚を持ってもらっています。

1200年という長い歴史のうち、わずか25年でも祇園祭の一端にかかわらせていただいていることは本当にありがたいことだと思います。

5月の末にまた募集がありますので、皆さん、是非、参加してください。良いですよ。長刀鉾の綱を曳くこともできるかもしれませんし、山鉾の山の見送りや前掛けをそばで見られますから。参加することによって直接、文化そのものに触れたり、事前に山鉾についての歴史を知ったり、勉強にもなります。20歳以上の方を募集対象にしていますので、32基全

部かかわらせていただいたら、20歳から始めても52歳、もう一回32基全部をやると84歳になってしまうんですね。まさに二度とはできないまつりなんです。

祇園祭という格式の高い世界的なまつりでも、皆さんの意識があればかかわることができるんです。「まつりをつくる」という本日のテーマの中で、皆さん自身がかかわりを持ちたいという意識を持つことが本当に大切だと思います。京都には祇園祭以外にも各地に色々なまつりがありますよね。毎日のように色々な所でまつりがありますが、そういうところにも何らかの形で参加できる余地はあると思います。自分から発して、自分から調べて、どうしたら参加できるか、そんなことも研究していただけたらと思いますし、また、主催されている関係者の皆さんも、そういう方を受け入れられるような窓口を作っていただけたら、京都のまつりはますます発展していくんじゃないかなと思います。

【平竹】

どうもありがとうございました。設立の経緯ですとか現在の取り組みの内容、あるいはそれに従事することの素晴らしさを中心にお話をいただいたと思います。

続きましては、静岡県からお越しいただきました、阿井様に国民文化祭のお話をさせていただきたいと思うんですが、実は京都は来年、もう一年半後くらいに迫っておりますけれども、第26回国民文化祭を開催するということになっております。なかなか認知度が上がらなくて、私共も困っているところでございます。昨年の秋に実施された静岡県の取組についてお話させていただきたいと思います。

【阿井氏】

私は、国際文化都市・京都の、“ちかつうみ”，近江よりまだまだ離れております，“とおつうみ”であります浜名湖を擁する静岡県から伺いました。

先ほどお話がありましたが、国民文化祭を御存知の方、手を挙げていただけますか。（来場者挙手）結構いらっしゃいますね。これだけいらっしゃるの結局、ここにおられる方が文化に関心があるからだだと思います。しかし、ほとんどの方は御存じない。ちなみに第一回国体は京都を含めた京阪神地区で、昭和22年に開催され、静岡県は昭和30何年と平成15年に2回もありましたが、今、見直しの動きがありますね。静岡県の国民文化祭は、丁度47都道府県の折り返し地点の24回目でございました。しかしながら先ほど、コーディネーターの方からお話ありましたように、認知度はまだまだということでございます。不幸なことに先ほど、平田先生から、文化の自己決定力であるとか、自分のお金でないと考えなくなるよというお話を伺いましたが、国民文化祭は国の行事なので、静岡県の場合は国から8分の1くらいお金を頂いたんですけども、ある意味では、お金は小額で、やってもらうことはもうコンクリートされているわけです。例えば、総合開会式、閉会式をやりなさい、それからシンポジウムをやりなさい、種類別の事業をやりなさいということで、ある程度枠がはめられているわけです。まさに文化の自己決定力を欠かされている事業というのが国民文化祭でございます。

静岡県では、必ず開催しなければならない事業に加えて、いかに地域の独自性をだすかということで、静岡らしさといえば、やはり食文化かなと考えました。京都は抹茶を含めていろんな流派が起こっておりますので、そういった意味では静岡のお茶文化は亜流かもしれませんが、静岡はお茶の全国生産の5割を占めていますので、お茶の文化を抜きにしては考えられません。お茶以外にも色々な水産物がございますので、そちらの振興も考えました。

更に、次代を担う子供たちに主役になってもらおうという視点で、様々な取組を致しました。とりわけ、キッズアートフェスティバルというのは県主催で小学生以下を対象にさせていただきました。非常にうれしかったのは、文芸祭や俳句、短歌への応募者が大人よりも若い方々の方が多かったことです。

それから、県内各地の特色を生かした事業をやろうということで、静岡県の西部地域、浜松地区には、ヤマハとかカワイという楽器メーカーがございまして、そこから情報発信をしようと、音楽を中心にジャズやブラスバンド、ハーモニカの事業を開催しました。中部地域は演劇ということで、平田先生にもお世話になっているんですけども、SPACという県が相当てこ入れをしたプロの団体がございまして。東部地域は、皆様、伊豆へ行かれたことがあるかもしれませんが、文学の宝庫ですから、文学関係を中心に取組をさせていただきました。それから、折角の機会ですから、郷土の先人、偉人を改めて見直そうということで、二宮尊徳や北条早雲、徳川慶喜、医者であり文学者でもあった木下杢太郎とかそういった人に焦点を当てました。ほかには、第9回全国障害者芸術祭を、私共は国民文化祭と一緒にやろうということで、太鼓の団体に出させていただいたり、モダンダンスのときに、車イスダンスの方に出させていただいたり、障害者と一緒になって国民文化祭を盛り上げさせてもらいました。

とにかく、認知度向上が、今から京都市が真っ先に取組まれることだと思えます。一つ心配しているのは、文化の日を中心にやると決まっておりますので、観光客の多い京都市にとってはある意味ではかきいれどきで、交通混雑があつては困るんじゃないかなと。

それから、今日御参加いただいた方のように、こういった機会により一層文化の奥深さや幅の広さを学んでいただければ、国民文化祭を開催したことの大きな意義になるんじゃないかなと思えます。私、文化は2年しか所管しておりませんが学べば学ぶほど、その奥深さというか幅の広さというか広がりを感じさせていただきました。是非、皆様には一層文化の奥深さを感じていただければと思います。

【平竹】

どうもありがとうございました。静岡での国民文化祭の成果ですとか、その中で印象に残られたお話をいただいたと思います。続きまして、3つのおまつりの中では一番新しい横浜トリエンナーレについて、平戸さんからお話しをお願いしたいと思います。

【平戸氏】

平戸でございます。

御存じない方が多いと思いますので、まずは横浜トリエンナーレの説明を致します。3年

に1度開催される展覧会のことをイタリア語でトリエンナーレといいます。1865年にイタリアでベネツィアビエンナーレという最初の「現代美術の国際展」が行われました。この展覧会は成功裡に終わり、その後継続して現在に至っております。そこでベネツィアビエンナーレにあやかって、その後の美術の国際展ではイタリア語表現で3年ごとに開催される場合はトリエンナーレ、2年ごとはビエンナーレという言葉がタイトルとして使われるようになりました。

横浜トリエンナーレは、日本における最初の「現代美術の国際展」であり、第1回目が2001年に開催されました。2008年は第3回目で、たかだか10年足らずのイベントです。主たる主催者は外務省の国際交流基金と芸術文化創造都市事業計画を推進している横浜市です。

2008年のときの概要ですが、期間が9月13日から約3ヶ月、会場は横浜市内の7会場で行われました。入場者数は30万、テーマは「タイムクレパス（時の裂け目）」というちょっと考えさせられる言葉が選ばれています。総合ディレクターには神奈川県立近代美術館の水沢勉氏が就任され、25カ国から72名の作家が参加しました。

どのような作品が出展されたかといいますと、通常の造形作品の他にいわゆるインスタレーションという場所、空間全体でアートとして表現する作品、それから映像作品やパフォーマンスという身体表現を用いたものも多く見られました。

横浜トリエンナーレで紹介されたこれらの作品は、先ほど平田先生のお話にもありました、コンテンポラリーアートというジャンルのものです。このコンテンポラリーアートというのは、現代美術と訳すより、今この時代を共に生きている、その同時代性をどう作品に表現するか、また感じてもらえるかということが重要である、というコンセプトに基づいて表現されたアートの総称ということができます。更に横浜トリエンナーレでは本会の表明文にも書かれているのですが、「作品だけではなく、観に来られた観客もその展覧会を構成するものとして重要である」としています。そうするとボランティア活動への参加者は、より積極的にアートに興味を持ち、通常の観客よりも一歩前で観てくれているより重要な存在という位置づけになります。この捉え方は第1回目のトリエンナーレからキーワードとして「街中への展開」、「市民協働の尊重」がうたわれてきたことでも示されています。

ボランティア参加は、第1回目のときが700名でした。前回2008年のときには2通りの登録方式でボランティア活動、つまり市民協働が行われました。一つは「サポーター」で本展が始まる前から、トリエンナーレを知ってもらい、盛り上げようと自主的に色々な企画を進めて活動しました。もう一つは「本展ボランティア」で、本展開催期間に、会場運営や関連プログラムの補助などをする活動です。もちろんサポーター・ボランティア両者間の交流も図られ、両方の活動に登録している人も多くおりました。

特に自主的な活動を展開したサポーターの活動内容について紹介しますと、まずは企画立案から始め、企画が絞り込まれたらその具体的な案件をプロジェクトとして個々に立ち上げます。先ほどの中井さんのお話じゃないですけども、必ず責任を持ってその部分をやってもらうことが重要でした。そして、全体的な調整を推進協議会で行うこととし、情報の共有

と活動の基本ルールを守って進めることを原則と致しました。

実際に行った事例としては、子供たちとのワークショップ、地元で継続して文化活動を行っている団体との交流、特に、出張して活動する、いわゆるアウトリーチ方式でのイベントも行いました。それから、もっと色々なアートを知ってもらおう、また、私たち自身もアートの勉強をしたいという観点から、トリエンナーレ学校と称して参加作家などの方に講師として来ていただき、セミナー形式で全18回の勉強会を行いました。

さらに、広報グループでは、サポーターズニュースというサポーターの活動やトリエンナーレ情報を紹介をするフリーペーパーを合計9回発行しました。そして本展の開催期間中には壁新聞や、ネット放送局で、トリエンナーレの反響や現在どういう催し物が行われているかというような情報を放送しました。また、会期が終わった後には、サポーター・ボランティアの有志で、横浜トリエンナーレの報告書も出版しています。

ではどういう人たちがボランティア活動に参加していたかということ、年齢別で見ると、若い人が若干多いとはいえ幅広い年代の人が参加していました。ボランティアへの参加履歴では、初めて参加しましたという人が8割いらっしゃいました。このことから、初めての方にも敷居が低く参加しやすいイベントであったということがわかると思います。そのほかの特徴として、文化的なイベントの特徴でもあります。女性の比率が高いということ、今回の場合も女性の参加者が7割以上でした。それから、横浜以外の地域からの参加者も結構いらっしゃいまして、全国から泊りがけでボランティアに参加したという人も何人かいらっしゃいました。ボランティア参加者への動機をアンケートの内容からみると、アートが好き、というだけでなくイベントに興味があったという方の参加が多いというのも特徴だったと思います。

今後の課題についてですが、トリエンナーレは、数年に1度の大きい花火のような展示会です。しかし、継続的に地元で行われている文化活動もたくさんあり、そこで活動しておられるボランティアの方たちも大勢いらっしゃいます。そのような団体とどう協調してトリエンナーレを意味づけていくか、そして地域の魅力を創造する文化活動のあり方について、みんなで考えるべき局面を迎えていると考えています。それから、トリエンナーレは国際展という位置づけで運営されているのですが、本当に国際展にふさわしい活動ができたかどうかという点でも考えさせられる問題があったと思います。また、市民協働は自主的に行う社会活動と定義されますが、一つの集団組織を形成することでもあるので、楽しく参加できるためには、それなりの責任を持って取り組むということ。特に参加者がお互いをリスペクトするということが重要です。個人情報だとか肖像権、著作権を尊重することから始まり、さらにコミュニケーションのマナーなど社会生活の基本を見直す機会でもあったと思います。次回の横浜トリエンナーレは2011年です。既にサポーター活動やトリエンナーレ学校がスタートしています。

【平竹】

どうもありがとうございました。横浜トリエンナーレの活動の内容や、最後には4つ課題

をお出しいただきましたけれども、この4つの課題というのは他の様々な活動にもある程度共通する部分ではないかと思えます。

静岡の阿井様からもう少し国民文化祭とボランティアの関係等についてどのようなことがなされていたかお話しいただけますでしょうか。

【阿井氏】

ボランティアというお話をいただきましたが、まず、国民文化祭を周知するために、県民からPRボランティアを募集させていただきました。そうすると、大道芸や芝居、人形劇といった方々から応募をいただきました。例えば、500日前、400日前、1年前といった節目に、そういった方々に参加していただいたり、県内各地で様々な行事があるときに参加していただきました。

一般のボランティアにつきましては、トータル500名くらいの御参加をいただきました。事前の研修はプロの方にお願ひしまして、もてなしの大切さを教えていただきました。その講師の方はなかなか話がお上手で、受講者の方の中には泣きながらボランティアや人をもてなすことの大切さを学ばれる方もいらっしゃいました。ですので、そういったボランティアの方のモチベーションは非常に高かったのではないかと思います。ボランティアの方には、シンポジウムの会場整理や周辺の交通整理等、ずっと立ちっぱなしで頑張っていたいただきました。やはり国民文化祭というのはそういった方々の支えがないとできないのではないかと思います。そこからボランティアの皆さんにも楽しさを感じていただけて、素晴らしい文化芸術の発表の場は見られなかったけれども、満足されて、笑顔で帰って行かれたのではないかと思います。もちろん不満をもたれた方もおられるかと思いますが、多くの方々には喜んでいただいたと思います。

【平竹】

どうもありがとうございました。

それではここで、これからのテーマを絞っていくうえで、平田先生から3つの取り組みについてのコメントをいただけたらと思います。

【平田氏】

今、お話を伺った中でも、いくつか京都市、京都府のこれからの取組にヒントになることが出てきたんじゃないかと思えます。

基調講演の中でも触れましたけれども、横浜トリエンナーレですとか、水都大阪2009、金沢の現代美術館にみられるように、コンテンポラリーアートといった、普段触れることがない、今までは非常にとっつきにくいものだと思っていた、コアのファンは非常に少ないといわれるものが、意外な程ボランティアを集めている。ここ数年はアートの世界も変わってきて、そういった分りにくいもの程、一生懸命説明しようという若いアーティストの意欲も出てきたんですね。昔は、正直いって、「アートは高尚なもんだから分からないやつは馬鹿

だ」という態度があったわけです。最近では、どうにかしてその作品に近付いてきてもらう、色々な角度からその作品の理解を深めてもらう、そしてアーティストの側も街に出かけて行って説明していく、体験してもらう、そういったものの全体像をアウトリーチというわけですが、そういった手法が、やっと日本に定着してきたのかなと思います。逆に言いますと、非常に日本の民度が上がってきているので、人が足りないからといって行政が動員するという形のボランティアはもはや通用しなくなっていて、ボランティアも質の高さを要求される。それから役割分担ですね。横浜トリエンナーレの話でもありましたように、実際に企画を立てるような方たちから、一日二日とにかく参加してもらうような方たちまで、色々なボランティアがいます。

海外の演劇祭ですと有償のボランティアもたくさんいます。あまり知られていないですけど、ルーマニアのシビュー演劇祭では、日本から毎年10人の若者を招いて、インターンでボランティア体験をさせています。約1ヶ月間にわたる演劇祭の運営に全部携わるんです。そういった今後の人材を育てるためのボランティア、そういった形もあるのではないかと思います。

外からの参加というのは、決して市民、県民、府民だけではなくて、非常に有意義なイベントであれば、他地域から、あるいは海外からでもボランティア参加したいという人が出てくるわけです。その人たちの宿舎はどうするのか。海外の演劇祭のボランティアには、多くの場合、宿舎や食事が提供されます。本格的に、半ばセミプロとして関わってもらう、それも、当然の意味でボランティアといわれるわけです。ですから今後、国民文化祭に向けてどういうボランティア活動が必要であり、どういう風楽しんでいただくか、もう一つはどういう風に階層化していくか、どう役割分担をしていくかが重要なのではないかと思います。

【平竹】

どうもありがとうございました。

海外の事例等も引きながらボランティアといっても色々な内容が求められている、あるいは元々決まった仕事をしていただくというよりは、企画的な部分等がこれから求められてくるだろうというお話であったかと思います。

ボランティアとして「まつり」にかかわる意義

【平竹】

先ほど阿井様から、イベントそのものは見られなかったけれども、ボランティアとして参加して良かったと思っていただけたという話があったと思いますが、今度は中井様と平戸様に、それぞれ、ボランティアに参画された方々のモチベーションをどうやって高めたのか、あるいは終わってからの感想等を何か伝え聞いておられるようでしたら御紹介いただけたらと思います。まずは祇園祭ボランティア21の中井様、いかがでしょうか。

【中井氏】

毎年600人を超える曳き手舁き手の人たち、またそれを周りでサポートする人たちに参加していただきますけれど、やはり何回も参加したいなというように、本当に歴史そのものを目の前で感じられるということで、素直に喜んでいただいております。ただ参加を希望する人が多いもので、残念ながら毎年というわけにもいきませんが。

巡行当日は、大変なんです。朝の5時か6時ぐらいに集合して、終わるのが午後3時から4時なんです。巡行に参加しますと、7時から3時くらいまでは、お茶以外飲みません。ものすごい雨のときもありますし、ものすごく晴れるときもあります。本当にしんどいです。でも、終わったあとはそのしんどさがないんですよ。一部の人は終わったあと、更に八坂神社の神輿を担ぎにいきますからね。やっぱりまつりを愛している、そこに動機づけがあるんじゃないかなと思います。何よりも自分の意思でやりたいと思う、そのことが極めて大切ではないかなと思います。まつりそのものに参加していなくても京都の人たちは、色々な形でまつりに参加されております。例えば、葵祭の葵。草を各町内、学校で育てていくようなことも、ボランティアとしてされております。「良かった」「是非行きたい」という、しんどさなどとは一切関係ない、心の中にある「参加する喜び」が原点にあるのではないかなと思います。

【平竹】

ありがとうございました。

今のお話も、長い伝統のあるようなおまつりでも能動的に参加するということに喜びが大きいのではというお話であったかと思います。

それでは平戸様、横浜トリエンナーレについてお願い致します。

【平戸氏】

横浜トリエンナーレの場合は、祇園祭のように「これをやりたい」という解りやすい対象が見えにくく、自分の意志で納得して参加するのではなく、なんだか判らないから参加してみたいという祭典の代表事例かと思います。

先ほど、展示作品の一部を御覧いただきましたけども、あれを見て、これは確かにすごい作品だなと理解できる人は、はっきり言って参加したボランティアも含めて、あまりいないのではと思います。ただ、普段の会話の中で、この作品が選ばれた理由を自分は理解できないけれど、何であのような造形を「すばらしい！」って言える人がいるんだろうねと、ちょっと引いた発言をしつつも内心では、もしその作家が傍にいたら、作品について聞かせてもらいたいと思っている人もけっこう多いと思います。そのような、ちょっと気になっている、だけでも普段アートと接する機会がないという人たちが、アートボランティアに登録し、話を聞き、様子を見ているうちに、「これって結構おもしろいじゃん」とのめりこむ人が出てくるんですね。ボランティア活動を通して、作品の背景に気づくことができ、世の中にはいろいろな発想で物事を見ている人がいる、特にアーティストと呼ばれる人々はそれを具体的に

表現しようとしていることに気づいて、自分の生活やものの見方が変わるとか、それを応援することを通して日常生活も見直すようなことも起こるようです。

文化ボランティアへの参加は、はじめはゆっくりですが、これは面白いと、はまり込んだ人は密度を上げて続けていきます。でも一方で、参加するタイミングの運不運もあり、こんな程度かと去っていく人も当然のようにいます。また、横浜の場合、京都には及びませんが、新しいジャンルのイベントが、かなり目白押しで、ボランティアも参加したいと思って調べれば、いつでも何らかの活動を見つけることができます。特に、横浜には、東京芸術大学大学院の映像研究科の校舎もありますし、映像・画像・メディア関連で横浜を拠点にしている組織や作家も結構いらっしやいます。そのため、先端に行くコンピューター作品の発表やイベント、更にメディア関連の活動も身近に行われています。

【平竹】

今、御指摘いただいたのは非常に大切なポイントだと思います。参加することで生活の見方が変わるとか、日常生活も見直すというところは、文化や芸術が持っている力、あるいはそれを色々な人たちと集まって共に実行していくことによって生まれてくる力なのではないかと思います。

さて、国民文化祭は全国持ち回りでございまして、都道府県を順番に回っております。静岡県の次、今年は岡山県ということになっております。その次は京都府なんですけれども、静岡県で実施されて、ボランティアで500人の方が集まられたということですが、今後それをどういう風につなげていこうとか、集まった人たちが例えば、相互に関係を作られて何か始まっているとか、その後の動きがあれば、御紹介いただけますでしょうか。

【阿井氏】

先ほど冒頭で静岡県の国民文化祭をあんまりいいような表現をしなかったんですが、まず、今になって言っておかないといけないと思ったんですが、おかげさまで214万8000名の方に国民文化祭に参加していただきました。丁度、静岡市で毎年開催され、約100万人が参加する大道芸のワールドカップが開催されていて、更に、浜松市が立体花博、世界モザイクカルチャー博というのを同時に開催しておりましたので、214万8000人の方々にお越しいただき、非常に盛り上がりました。また、文化とお金はある意味では不即不離かなと思いますけれども、経済波及効果は大体予算の約10倍、178億5000万くらいという数字が出ています。もちろん県民の皆様にとっては、それぞれの地域で地域の素晴らしさを再認識する絶好の機会だったということです。

本題のボランティアの話ですが、私共は国民文化祭を開催する1年前と3月に入ってから2回、国民文化祭が終わったあと、何を残すかということ、各市、町の人と話をしました。今の時代、なかなかボランティアの方の氏名、住所を含めて、情報管理が難しいということがございます。静岡県の事業に対して集まった500人のボランティアの方に対して、国民文化祭後にどういった形で御活躍いただけますかというアンケートをさせていただきました。

これから県で様々な文化活動をやっていきますけども、御参加いただけますかということで、500人の中の何割かの方から、県の文化イベントに参加したいというお返事をいただいております。やはり一度ボランティアでおいしさを味わった方は、またやってみたいなと思っていただけるのだと思います。

【平竹】

3人の方からお話をお聞きしましたがけれども、これらについては、先ほど平田先生が講演でおっしゃいました文化の自己決定能力ですとか、子供の頃からそういうことに触れる大切さ、それが今後の都市、地域の競争力みたいなものにも影響を及ぼすというお話とかかわりがあるのではないかなと思うんですけども、そのあたりでコメントがございましたらお願い致します。

【平田氏】

ボランティアの方たちにどれだけ主体的に参加してもらおうかというその仕組みがやはり問題でしょうね。自分たちの行事なんだ、あるいはもっと極端に言うと、自分たちがいなければ成り立たない行事なんだということをどうやって実感させるかが、行政のこれからの仕事になってくると思います。全部をお膳立てしないということが大事なんじゃないかなと思うんですね。

私は埼玉県の富士見市という非常に小さなまちの劇場で芸術監督を5年間やっていたんですけども、ここにも、市民の方たちが参加し、毎月1回、劇場の企画についてチェックし、提案をしていただく、サポート委員会というものがあります。この人たちとそれ以外のレセプション、受付とか館内の誘導等も登録制で今150人くらいの方に登録していただいていますので、うちの館はそこに対しては全くプロへの支出は無いんですね。交通費だけをお支払いしていてコストダウンになる。その方たちは、企画にも参加してくださっているんで、うちの館の主催公演で、1週間前2週間前に、どうもチケットが売れていないとなると、私鉄沿線の駅前に立って自分たちでチラシを配ってくれるんですよ。市民の方たちが。自分の会館だということになると非常に積極的に動いてくださる、その主体性をどう持たせていくかということが、非常に難しいし、成功の秘訣なんじゃないかなと思っています。

今後の取組について

【平竹】

ここで、後になってしまっていて恐縮ですが、京都市の文化芸術都市創生計画について、御説明したいと思います。

京都市では3年前から文化芸術都市創生計画というのを定めまして、これがこの10年間の京都の文化行政の基本となる計画ということになっております。文化芸術による魅力ある地域のまちづくりの推進など、5つの先行プロジェクトを進めていくというのが最初の5年

間、あと2年残っております。芸術家を支援すること、子供を育成すること、文化ボランティアも含めて市民に参画いただくこと、それらに基づいて京都という一つの都市の政策ですとか、京都の中のそれぞれ特色ある地域のまちづくりや文化の振興ですとか、文化財を保護したりあるいは活用したり、そういった地域づくり・都市づくりを進めていく、そのことによって更に文化力を高めていくということです。もともと施設や文化資源などはたくさんございますので、より活性化していこうということでございます。

その中に京都市文化ボランティア制度というものがございまして、市民、芸術家、企業の皆様に様々な形で文化芸術活動に参加していただくために実施しております。これは計画より古く、平成15年の1月から始まっております、現在480件登録がございます。今日の催しにも文化ボランティアの方に受付等お手伝いをいただいております。そういったサポートボランティアと、実演ボランティアということで、私はこういうことが教えることができますとか、こういうワークショップだったら企画できますということでお手伝いいただくこともしております。

最後に第26回国民文化祭ということで、京都の魅力を全国に発信するという事になっておりますけれども、先ほどから話は色々出ておりますが、第26回国民文化祭・京都2011というのは、平成23年10月29日から11月6日まで、「こころを整える～文化発心」をテーマに、京都市を中心に府内の各地で約70の事業を繰り広げるという事になっております。全体の統括は京都府がやっておりますけれども、京都市が主催する13の事業については京都市も実行委員会を作って進めていくということになっております。色々な委員会を作ってお話を聞いていますと、皆さんある部分、京都は文化の中心だというプライドを持っておられます。やはり京都らしさがあらわれるような国民文化祭にしていきたいということで、色々な知恵を出していただいたり、かなり意気込みを持って取り組んでいただいておりますので、楽しみにしていただければと思います。また静岡県と同じように実施がもう少し迫ってまいりましたら、色々な形でボランティア等を募らせていただくかと思っておりますので、その際は是非、積極的に御協力をお願いしたいと思います。

これで私からのPRは終わらせていただきまして、本題のパネルディスカッションへ戻らせていただきます。

今までのそれぞれの方、平田先生のお話も含めましていくつか重要なキーワードが出てきていると思うんです。それは先ほど平戸さんがおっしゃいました生活の見方が変わるとか、参画することで日常生活を見直すということが一つあると思うんですね。本来的に文化芸術の創造が持っている大きな力だと思うんですけれども、それにボランティアとして参画することでも、その可能性を発見していけるということはすごく大きいのではないかと思います。平田先生もおっしゃいましたけれども、そういうところに受動的ではなく主体的に、能動的にかかわることの大切さということではないかと思います。一人でするわけではありませんから、皆さん集まって、そこでまた新たな出会いが生まれたり、何か日常生活とは違う別の世界への入口になることでもあるのではないかと思います。文化芸術活動に参画いただくということは、色々なプラスの面があると思うんですけれども、それぞれの活動を今後どうい

風に展開をしていくか、平田先生がおっしゃいましたように、これからは今までとは違って活動内容の大切さというのが非常に大きなウエイトを占めてくるんだということを踏まえて、それぞれ御発言いただきたいと思います。それでは平戸さんからお願いします。

【平戸氏】

今のお話に一点付け加えさせていただくと、主体性の重要さという点で、印象に残っているのが子供たちの参加なんですね。子供の参加があると、大人たちも本当に喜んでくれて生き生きするんですね。それが重要であることがまず一つ。それ以外に子供を子供扱いしちゃいけないというのが分かるんですね。一生懸命、自分も一人の市民として参加している、そういう意識で子供は子供なりに考えてやってくれるし、またそれでみんなが盛り上がるという事例が結構見られました。

トリエンナーレをやっている時期に連動して「黄金町バザール」という活動がありました。黄金町というのは黒澤映画の「天国と地獄」の舞台であった、以前は麻薬や売春がはびこっていたところで、今でもその余波が残っている場所です。その中で今、アートで街を活性化させようという事業が行われています。その地域活動の事例でも、ある子供の生き生きとした活動が大人たちのモチベーションを上げたということもありました。

子供向けのプログラムでは、教えながら楽しく参加してもらおうという発想で大人は考えがちですが、子供の方が新鮮な発想で流れを変えてくれる可能性を持っているということです。「子供をなめちやいかんぜよ」という気持ちを持って子供と接すること、そうすると、そこから先への継承発展も大人ではない着想から芽が出てくる。それが、すごく重要なんだと思いました。

横浜トリエンナーレのこれからの活動についてですが、前回のリーダーが次回も継承するという事ではなく、また新たな可能性に期待をした新体制でスタートすることになると思っています。現在、横浜美術館関係者の方が主体的に動き、今話をしました黄金町バザールとか横浜の地域に密着した、いくつかのアート活動と絡めた展開を模索しているようです。黄金町のほかにも寿町といって、丁度、大阪のあいりん地区、釜ヶ崎のような地域もあり、そこにアーティストやボランティアが入って行ってアートによる地域活性するという、本当に中途半端な気持ちでは臨めないアートによる地域活性活動も始まっています。どこまでトリエンナーレに興味を持って参加する人たちがこの様な動きについて来てくれるのか未知数ですけれども、自分たちの文化環境と、そこでの生き様ということを考えた中から創造される文化を、展開しようとしているということかと思います。

【平竹】

ありがとうございました。

では、静岡県は国民文化祭を経て、これからどういう風に文化行政、住民の方の参画を考えておられるのか教えていただけたらと思います。

【阿井氏】

まずは、一昨年、平田先生に静岡県へお越しいただきまして、忘れられない言葉があるんですが、「子供の頃からシャワーを浴びせるように本当の芸術文化に触れること。それでないとセンスが磨かれない。」という言葉が講演でおっしゃっていたという記憶があります。次代を担う子供たちが、そういった意味で、我々静岡県にとっても大切だということを痛感しておるところでございます。

今コンクリートから人へというような話がありますが、平田さんは内閣官房参与でおられますので、そういった影響もあるのかなと思うんですけれども。某大手の建設会社では、「子どもたちに誇れるしごとを。」という看板が今建てている建築物に貼ってあるそうです。だから子供さんたちに大切なものという考え方が、今ある意味では一番問われていることなのかなと。少子化ということもありますし、県内の中学、高校等を見ますと、文芸部や演芸部といったものが、毎年、減ってきているという切実な問題がございます。そういった意味では本物の文化に常に触れる機会を静岡県としても設けたいと思っています。

従いまして、国民文化祭では「創造支援工房しずおか」というものをやりました。大人の方については、自主的なボランティア、文化芸術に自主的に取り組んでいる方々に100万円を限度に差し上げますよという形で22の団体に参加してもらいました。もちろん選考した結果ですけれども。それから、Kids、子供版については、30万円を限度に自らの創造をして下さいよということで46の団体からそれぞれエントリーをいただきました。

今後の話ですが、平成20年の3月に「文化振興基本計画」というものができまして、「創る・観る・支える」ということで、芸術家の皆さんは創る、県民の皆さんは観る、支えるというところがこれから一番大切なんですけれども、何か企業さんも含めて、芸術家の方も含めて、支えていただくということで、感性豊かな静岡県を作りたいということでございます。実は京都出身の知事が昨年の7月から就任をされまして、非常に文化に造詣が深いものですから、国民文化祭をいわゆるキックオフの機会にして、文化芸術の「花咲くしずおか」「ふじのくに芸術街道」ということで、静岡県全体が博物館になるように、とにかく国民文化祭もそうですし、今もそうですけれども、文化芸術にかけるお金について苦情というのは聞いたことがありませんでしたから、そういった意味ではありがたいなと思っております。

国民文化祭は相当程度の工夫と仕方によっては効果がある事業だと思いますので、是非とも26回目の国民文化祭の成功を心から祈念しております。

【平竹】

どうもありがとうございました。最後になりましたが、中井様から祇園祭のボランティア21の展望等についてお願い致します。

【中井氏】

静岡の方から国民文化祭はすごい催しだとお話がありました。ずっとお話を聞いていると、何かちょっと私はほかの方と話が違わないか。というのは、この話がくるまで、国

民文化祭とかを正直言って知らなかったんですよ。一生懸命に行政の方がPRして、多分ここにおられる方はそういう文化関係のボランティアの方じゃないかと思えますけど。でも、京都市は独自に色々なところで文化発信をされていますし、場合によっては福祉施設の訪問とか、自分たちの芸術を発表する場もありますし、下地はものすごくあるんですよ。240年前に途絶えたまつりが若者の手で復活したということもありますし。だから、下地はきちっとあるんで、その部分をどう皆さんの中で発露をしていただけるかという部分がこの文化芸術という一つのまとまりの行事として、成り行きを決めるんじゃないかなと思います。

我々祇園祭にかかわらせていただいていますけど、我々がかかわるうえで、気をつけなければならないのは、毎年、同じことの繰り返しだということです。魅力あるまちのまつりへの参加ですので多分大丈夫だとは思いますが、それでも自分たちの心の中に傲慢さとか、怠慢さとか適当とかそういうことを生み出しますので、祇園祭ボランティア21としては、構成団体、個人の皆さんに発信し続けることが必要なんじゃないかなと思います。

非常に細かいところですけども、京都のまちは色々なところで地蔵盆もありますし、各町内で9月には小さい子供たちが神輿を担ぎますから、そういう細かい一つのまつりを地域の皆さん方に大切にさせていただくことが、子供たちも含め、文化そのものを知るきっかけになるんじゃないかと思えます。

平田先生には申し訳ありませんが、私は新しいアートとかその辺のところは疎いもんで、どうもよう分らないところがありますけれど、でも、絵は素晴らしいし、彫刻は素晴らしいし、見る方によっては色々変わるんで、そういうことを受け入れる心の余裕なり、ありようを我々の中で作っていく必要も新たに感じました。またそのことを祇園祭ボランティア21にかかわっている団体の皆さんに発信することで、これからうまくいくんじゃないかなと思います。

【平竹】

どうもありがとうございました。私も、祇園祭にはわりと近いところで、ずっと子供の頃から過ごしているんですけども、本当に小さい、3つぐらいの子供の頃からおじいちゃんに手を引かれて歩いて、大きくなれば囃子方になってとか、そういう一つ一つの階段をのぼっていくという意味では、本当に子供の活躍というのは大事なかなと思いますし、図らずも3人の方から子供という御指摘がありました。最後になりましたが、平田先生からそういったことも含めましてコメントをいただけたらと思います。

【平田氏】

1月ですか、京都市内の小学校でモデル授業をさせていただきました。以前にも一度、御所南小学校でさせていただきましたが、コミュニケーション教育ということで、各小中学校に演劇やダンスの実演家を派遣する授業が来年度から本格的に始まります。これは全国で始まるんですが、特に京都市は力を入れていただいている、相当数の小中学校でこういった授業が始まることになっております。ですから、そういった下支えをしていくということです。

ね。

それから京都市はまだ良いんですけれども京都府となると非常に広いですから、よく文化とかアートに行政はあんまりかかわらなくて良いんじゃないかという方もいらっしゃるんですけども、放っておくと、ものすごく地域間格差が出てしまうわけですよね。地方の子供たちには触れる機会がなくなってしまう。それから、所得間格差も非常に大きくなってきますよね。やはり所得の低い家庭の子供たちはそういう機会がどうしても持てなくなってしまう。ここはどうしても行政がサポートして、ある程度学校単位とか、地域単位でそういうものを経験させる機会を提供してあげないと、繰り返しになりますけれども、最終的にそれが地域の競争力を衰えさせることになりますので、教育というのは非常に重要なんじゃないかと思います。そこについても、京都市でまつりの部分と、芸術教育の部分と車の両輪で進めていただけると良いんじゃないかなと思っております。

【平竹】

どうもありがとうございました。今の平田先生のコメントを、本日のパネルディスカッションのまとめのような形にさせていただきたいと思います。

本日御参加いただきました皆さん、最後までお付き合いいただきまして、ありがとうございました。是非、お一人お一人にそれぞれのまつりを見つけていただいて、市役所から色々な願いをすることもございますし、そういうときには、積極的に御協力いただきたいと思います。それぞれの場で御活躍されることを御期待申し上げます。

3人の先生方、コメンテーターの平田先生、ありがとうございました。